

● 高澤良一 第五句集 鳩信

● 入院日誌

カテール検査入院

食器には皆蓋のあり万愚節

何もって本復巷は花の頃

検査日の諸葛菜彩薄れをり

この術例三百ほどと亀鳴けり

検査の為の検査蛙の目借時

春の夜のまなぶた閉じて患者たり

患者食済みし春昼箸洗ふ

目に見えて体力戻る春大根

大部屋の消灯までの春灯

大部屋の患者寢息の朧なる

春眠曉を覚え目覚めぬ大部屋に

亀鳴けり医術日進月歩の世

体温計鳴り出す春の夜のとばり

春の夜の手術痕撫で寝入るまへ

春の夜を看護婦消灯触れ廻る

点滴の終りを告ぐる朧ごゑ

春夜尿りて体外へ出す造影剤

退院の途次の暮春の中華蕎麦

梅雨といふ辟易月に入りにつけり

一通り聞きて入院梅雨海鼠

黴どきの無精が無精生む寢床

東京の朝焼け入院一日目

易々と蠅にたかられ一患者

夏物のパジャマ引っ掛けギブスの上

七夕の夜風にあたるギブス組

ギブス組涼みがてらの莫迦話  
包帯に患部包みて星祭  
かがんぼ来夜間急患窓口に  
おろしたてパジャマに夏の夜の更くる  
胸板に夜風涼しみゐる患者  
病床に妻もたらしぬ厄除護符  
浅草寺厄除け  
幾そ度かがんぼ吾の採血よ  
注射針ぬうつと太き昼寢覚  
採血の跡黄味がかかる肌小暑  
夏の夜の採尿採っても採ってもや  
人参も余さず食ふぞ新患者  
病棟の深夜冷房音どすん  
白扇に茶化しきれざる病景色  
永日のそもそも何でこの病ひ  
術後の日の為の浴衣を着慣らしぬ  
真裸にて辿り着きたる正念場  
甚平が術後の吾を待つてをり  
手術着に所詮孤りとなる裸  
烏賊俳諧オペ景色医長(病棟は水槽)やおら脈拍とりにけり  
蛸博士ドクター 腹式呼吸教授せり  
執刀はノコギリ鮫の某教授  
麻醉利き水母漂ふごとくなり  
蘇る為ICU室の管吸ひ罌粟のゆめ  
麻醉覚昼寢覚ではなかりけり  
細魚さより嬢ナイス看護婦寝起きの声掛けぬ  
救命の手術当日管のいろいろ巴里祭  
管ぶらさげ鳴り物入りの巴里祭

ほぐれ初む麻酔の糸や脳涼し

術後にしてこんなうまき一氷片

冷房裡才家人と面会へ顛末記筆談に

天蚕いろカーテンに覚む患者なり

新聞売りのおばさんのこゑ明易し

術後十日重湯すすりて病ミ海鼠

暑き日の飯粒何處に三分粥

声の主一体誰や昼寢覚

元気出てかぼちやいろなる尿の色

豆ごはんほつと安堵すその彩に

肌伝ふシャワーに骨皮筋右衛門

患者等大部屋のわれらが宝庫冷蔵庫

床擦れに手こずり居れば夏曉の日

牢名主めく患者ゐて部屋晩夏

見舞客勝手に変へて冷房「強」

素手素足ずいぶんすつきりした色に

昼寝せるゼブラ縞柄パジャマかな

退院の挨拶だぶつく夏ズボン

話かいつまんで云へばと古扇

自宅にて養生始まる朝の蝉

脚力をつけんとゑのころ草の道

ゑのころの光れる試歩は朝の内

藪の葉に大いなる穴開けし奴

病み上がり足許いとどに跳ばれけり

朝蝉が啼かぬとある日来たりけり

水を搔く仕草も秋のあめんぼう

かまつかの錦の御旗振るごとし

秋寂びて縦一文字手術痕

病閑やくわりんのおいど日を受けて

● 玄帝

歩かぬは万病の因もと花八つ手

作そもさん麼生と実さくろ問ひ掛けくるごとし

冬菊のいちめんそれも麴こうじ色

また一つ家毀たれて枯木星

町内の左官屋の菊みいろ三色ほど

朝露のまだ干ぬ内の柿もみぢ

ため息を一つつくごと帰り花

臍物の如き朝刊取りに冬

七紅葉坂 伊勢山皇代神宮五三あつさり組と凝り組と

もどかしく磴を登るも七五三

おねだりの僕は僕はの七五三

水野毛山動物園の面に桜紅葉の心ばえ

アナグマに落葉臭さと尿くささ

落葉手にとり霊長目ひと人間科ひと人間

アムール虎右往左往の黄落期

もみずれりオランウータンの体毛も

堂前龍ノ口竜口寺に靴の累々御命講

御命講鳩の目をして祖師さまは

雀等も連れ立ち御宗祖日蓮忌

葛黄葉遠慮がちなる色合ひに

くわりん落つ落つるとおもひゐし矢先

枇杷の花そこはかとなく癒ゆる傷

火がとほって来たと湯豆腐動きけり

一飛雪塩原行ひゆうと川面をよぎりけり

旅仲間雪つこといふ濁り酒

川向ふ今しも木の葉時雨かな

残る葉の幾枚枯木のプ・ラ・タ・ナ・ス

次々降る山の木の葉と歩を一に

涸川の涸れ灌木に移りけり

紛れ込む落葉一片脱衣籠

枯れ木路線バスつ葉臭き湯町の子が乗り来

川端の鴨の口々雪来ると

宿木にほうと佇む耳袋

おとがひ 頤煤逃げの地は三浦半島大根台地に大根台地の風鳴れり

膝小僧へ海辺育ちの冬の蠅

岬なればこそその日溜り藪つばき

切干に午後から波の納まりぬ

切干は紐に跨り相模灘

割干に日の経ち方といふがあり

頬被正月ものの覗突漁みつきりよう

手術などそんなこんなひとしとせの一年で

いてふの木枯れて素性といふが見ゆ

銭湯の逝く年映す大鏡

ねんねこに肌着乗つけぬ脱衣籠

一年の始めの氣息もて起床

歳旦誌上吟古風当風張り合うて

カんだりするから額縁歳旦吟

心臓のポンプ順調去年今年

初詣羽田航空神社かな

句をつくるはた又授かる太郎月

心臓知多半島篠島行の直しが利きて旅始め

地図宮津昭彦さん好きの方と初旅して三河

伊勢海老の伊勢を向うに島泊り

寒木瓜咲き窯元家裏相似たり  
土管坂土管の端に水仙花  
常滑の土管色して咲く菊も  
窯主が湯呑みまけ呉れ初商  
横腹に知多の朝日よ冬鷗  
乗初の胴震ひせる高速艇  
何の生簀かんの生簀と知多初旅  
三日果て金海きんこ鼠色なる鳥羽の空  
正月顔せる皮剥を賞味せり  
ひよろろんと雨の四日のとんびかな  
見夜火堂夜\*見夜火堂は灯明台（灯台）のこと又倍子の実のくろぐろと  
百合鷗浜より翔ちて伊勢の方  
東風吹いてちりめんじゃこの水揚場  
捨て積みの焼酎瓶に冬の蠅  
\*鳥弘法は島内八十八ヶ所にある石仏  
明日葉の道を巡りて島弘法  
神明神社  
三日の灯入りて男宮の常夜燈  
半田運河昔日  
酔を運ぶ舟の往来冬鷗  
醸造元飯桐の実のたわわなる  
七種の富士はずしろ色をして  
隆起せる傷跡撫づる寒の入  
古傷をつゝかれしごと鴟啼けり  
枯蔓朝比奈峠越のずるずる引けて土埃  
羽ばたいて桜の芽立ち促せる  
枯蔓のやみくもをまのあたりかな  
枯蔓の嘗ての一途なべて見ゆ  
ターザンが目をつけさうな枯蔓も  
山清水鳴れり朽葉を潜り出て

冬の清水音色もろとも掌に汲めり

春塵杉本寺の分厚く赤茶け煤仁王

風葉山行に乗る手際宜しも冬鷗

べつとう時化鳶大胆に急降下

浅春の男波女波をおっぺして

紅梅は生菓子ほどの湿りもて

白梅のはたと膝打つ明るさに

川いっぱい使って春の水ながる

接骨木の芽と手を添へて申さるる

奥石廊下田 石廊崎行アロエ畑の中に村

下田港きだちちようせんあさがお咲く

ハイビスカス花の真中の突起物

春愁ふウツボカズラに指入れて

完熟のパイヤそれを賞味せん

ラン棟に舌噛みさうなランの名も

石廊崎沖ターナーの冬白浪

安直楼唐人お吉経當の店余寒車軸を流す雨

総領事玉泉寺ハリス好みの仏手柑

総領事ハリス出府圖春の雨

熱川の宿てふ宿の春灯



●東帝

下曾我下曾我 流鏑馬の梅皚々の方十里

干蒲団富士の白妙差しにけり

流鏑馬の馬首めぐらすに冠雪富士

永日の馬体に鞭を一の射手

べん橋本 かくりの里べんべんと堅香子反り返り

つんのめり咲きのかたくり風受けて

控え目になほ控え目に花かたかご

かたくりの花のまだ咲く鄙曇り

かたくりの花のむつつり右衛門かな

かたくりの花の貧乏揺すりして

控へ下諏訪御柱祭をる秋宮一之御柱

御柱落とす地点へ白き蝶

山風に木遣り起こりて木落とし坂

坂上の空へせり出す御柱

落とさんと諏訪の春宮二之柱

元綱に小綱を掛けて木落とし衆

木落としはまばたき一つする間

宿毎に伊那路のさくら愛でゆくも

花高遠花祭りに浮かれ来たる奴に高遠城

藩校の教場抜けて花の風

永日絵島困屋敷の一机据えあり絵島の間

庭木芽吹く頃となりをり下女詰所

行水所コヒガンザクラ明りして

長官横須賀安浦 旧鎮守府長官官舎愛づ櫻なりきと顎引く

鎮守府の櫻の上に海展け

永日通院の欠伸百度して待たされ

造影劑かつと胸板焼く暮春

採血の血管選れり目借時

一滴の雨にも遇はず初ざくら

なかなかの櫻と幹に手を掛けて

一雨に花崩れたり北の丸

鶉飛來花散るからに散るからに

怪童の腕かいなのやうなさくらの枝

真つ白な花に群がる風一目

満開の心を一に濠桜

只管になること落花には如かず

夫婦して見にゆくさくらありにけり

夜桜に誘ってみてはと付け足せり

戻りてさくらに彩の戻るなり

山櫻さう山櫻葉の臙脂

夜桜にしこたま冷えて戻りけり

四月馬鹿達者と云へる褒め言葉

ぼうたんの匂ひ薄める風立ちぬ

緋牡丹の錯乱状態つづくなり

筍は口を噤んで掘るべかり

亀鳴かす程でなくともこの俳味

目借時沽券てふ字が書けなくて

浅春の闇のとりもつ睡りかな

連れ合いの渾名呼ばるゝ牡丹寺

それはそれで趣ありぬ霞草

咲きさうな処に咲きぬ三味線草

がつくりと見せ場つくりぬ緋の牡丹

頭亀戸天神の中に藤の暗がり垂れ込めぬ

越天樂奏づるごとく下り藤

藤棚の暗部雫を零しけり

花房を伝ひて微光下り藤

亀戸の煎り豆本舗藤の雨

旧古河庭園  
黄の似合ふ薔薇の名札はオクラホマ

金澤八景 野島海岸  
蟹蟹と岩を起こして蟹捕る子

干潟踏みすつくと健康さうな脚

抛り投ぐ潮吹潮吹にぞ当る

舟虫の俗気さらなる俗気呼ぶ

やぶからし最初考え違ひして

浦島草蕭白好みの画材にて

トラ鱧の薄茶の縞の涼しさう

車輪梅海匂ふとき匂はぬとき

夏みかんの花の匂ひを風薄め

接吻といふ語思へりかたばみに

大船植物園  
常夏のウツボカズラのサキノホン

薔薇の赤き棘も美観の一つにて

陽谷山 龍寶寺  
観音は空に存すや桐の花

はつなつの砂場のままごと遊びかな

桐描くには水彩に如くはなし

桐の花入れて一景仕上げけり

桐咲いてやうやく空がおちつきぬ

桐の花程よき距離に立ちてみる

竹秋の竹林鳴動して止まず

あらくさ  
雑草に掴まり立ちのやぶからし

泰山木落葉木片降る如く

山女魚らの口肥えて来ぬ青葉どき

花了り椽うっさうとして来たり  
女貞咲かせこの家地味も地味  
椎の香のこれぞてふ香に立ち止る  
馬刀貝の素つ頓狂を鷺掴み  
謡は<sup>能六浦</sup>なむ青葉楓の面目を  
<sup>小机城周辺</sup>ひまはりを十本植うは晴れがまし  
口つぐむ百合に魂胆あるごとし  
蕾む百合あうむ返しをせる如し  
ニス塗りし如くに百合の蒼かな  
朝風は<sup>川崎 妙楽寺から東高根森林公園へ</sup>平らに吹いて額の花  
枇杷の木にだらだら雨の生まれり  
聞き来し道わからなくなり立葵  
あぢさゐの雨の葉っぱのにほひかな  
六月の鴉どすんと樹頭に降り  
柵の中蚩袋の変電所  
立葵てふてふ道草喰つてをり  
かがんぼの雨やり過ごす葉裏かな  
索性よき樹木といはむ花水木  
伽羅路をつまむ箸もて「例のほら」  
大緑陰鳩・人・蜥蜴憩はしめ  
棕櫚の花はらはら零れカステラも  
梅雨空の突つかえ棒の外れ月  
さみだるゝ尿道造影剤検査  
はつなつの尿を所望す泌尿器科  
床ずれのはつかに在りぬ更衣  
養生してひととせ経つか枇杷色づく  
なうなうと止まるこの蠅不埒なり

硝子器に箸の当りて夏の音

あぢさゐが咲いて清潔無比の園

あめふらし遊びあかして磯日暮れ

蹴返せばはらほろひれと馬陸かな

石榴散り振袖火事の火の粉めく

どむみりと大山入れて植田水

白菖蒲蓄きりきり鏃めく

泥運尊徳生地ぶ燕律儀に栢山村

あぢさゐにはやりすたりの色ありし

山峡の風に黄ばみて余り苗

すかし百合ちらほら見ゆる御殿場線

みるからに元気のかたまり水馬

朝は朝の智が働いて朴の花

心臓にも運動療法青き踏む

ざりがにのそっくり返るはこけおどし

ダダ三浦半島 妙音寺ダツと山百合咲いてなだれけり

半島の空をテッペンカケタカと

涼しさは染めつけ鯰向付魯山人展

筍は何處にでも出る度し難し

●炎帝

愛宕神社千日詣

ほほづきの鉢提げ愛宕大権現

ほほづき縁日笛ひやらひやらとひやらひやらと

大茅の輪雨具携え潜りけり

梅檀の葉のこまごまと梅雨に入る

鎌倉近代美術館

モガ・モボ展一渡り見てソーダ水

水馬雨に追ひ立てられにけり

妙本寺

擬宝珠の花にはじまるお題目

お出ましの守宮と暫しにらめっこ

落梅を一つ處に庭そうじ

夏掛のひやつとせるをあてがひぬ

伊豆へ避暑今は山中今は浜

手にとりし団扇ことしもこの図柄

天牛の朝飯前の力かな

搔き鳴らし我が家自家製氷水

腹の上団扇はたはたさせをりぬ

口癖のえらいえらいの夏始まる

夏掛して妻と思ひ出話など

古団扇扇ぎて去年の手術のこと

かかりつけ心臓外科の冷房利く

天然の涼風窓より浅草線

内職洋裁にて戦後を乗り切りし母曰く

黄泉にては閻魔の禪の丈詰めん

汗っかき大漢にして大ジヨッキ

梅雨どきの眼ごろごろ使ひ過ぎ

汗くさき肌着ステテコシャツの山

梅雨鴉けふは出ばって近所の樹

はんちくな齡を取るまじ豆の飯

夏迎ふ駝鳥に片減りしない脚

あじさゐの毬に見事に乗りし色

俳優伊藤雄之介逝く

時代の眼涼しく使ふ雄之介

菖蒲湯の菖蒲に術後の身を寄せぬ

アメリカンチェリー一粒底光り

普段着の海月の単衣よかりけり

エッセイのとば口に佇つ夜の秋

大暑の頭巡らすよいやさよいやさのさ

\*のうぜんに漢名ありもつかく

漢名は目赫爛れし夕空に

のうぜんの似たり寄ったり花なだれ

貝原益軒「花譜」

のうぜんは脳破る花そを嗅ぐな

祭の子笏遊びの町内湯

挫折にもいろいろありてのうぜん花

三伏の我が身一つを持って余す

身空てふ言葉も死語に団扇風

手を膝に金魚屋親爺目を配る

足のつぼ崑崙揉みてより昼寝

怪鳥を出して見せうぞ雲の峰

天日干し鰹を吹けり時津風

梅雨雀何か追い詰めたる羽音

水ばかり掬ひて金魚何時掬ふ

射的屋の手持ち無沙汰も夏祭

夾竹桃ブツダガヤなる聖地あり

とりついたりとりつかれたり葛の蔓

漢名の音の締りのよくて紫微

からす瓜真白き花の怯え咲き

何するにも大勢は佳き豆の飯

そつとして置いてくれよとだんご虫  
いい加減降って止む雨花南瓜  
手術して一年経つかビール注ぐ  
夜顔や老人ばかり殖ゆる世に  
ここのごころご無沙汰残暑見舞出す  
青くわりん既に一徹者の貌  
蜻蛉の面白がりぬ穂先の揺れ  
沼辺より翔ちて蜻蛉の飛行艇  
家康公御廟きささげ青葉して  
日光日光  
滝落ちてアオダモの木に轟けり  
別名を鳥肌立の滝となん  
日光山一巡りして蜜豆  
夏葎埃立たせて雨の来る  
縦あふぎはた横あふぎ団扇風  
三尺寝濁世に用はなかりけり  
隣席の扇の風にあやかりぬ  
立秋と云はれて空の海のいろ  
わが持論一步譲りて団扇風  
気骨あるその歩きぶり羽抜鳥  
すいっちよと云ひて足音しのばせゆく  
結局は一日蝉を聞く羽目に  
うだうだと頭でっかち蝉啼けり  
盆の入電車幾分空いてをり  
炎昼をへたばりをると誰が云ひし  
雷公の所持品古ぼけ大太鼓  
捕虫網持ってほつつき歩きけり  
噴水鴻雪録(末廣鐵腸)遠く望メバ鯨魚ノ潮吹クカト



旧季題ラムネに明治の活気あり

うつくつと蓮の奥より誰がこゑす

蓮葉の大きなやつがはたと昏れ

蓮弁のグラデーションを愉しめり

蓮田べり亀の子ぷかぷかやってをり

寝返れば傷口ひくと夜の秋

朝蟬のいやに啼くとき啼かぬとき

そら来たと白雨に掌を差し伸べぬ

アロハ着てはしやぎたくなる気の未だあり

盲蟬ぶつかる音にまどろまず

氷水落ち着くところに落ち着きぬ

蝉時雨だまらっしやいと夕立来

はらからは屈んですなり芋殻焚

疎開地の機銃掃射の諸畑

二夏を経たる金魚を死なしめき

鼻声に何か言ひたげ朝の蝉

夏草を引きちぎっては歩むなり

厨房へ徹る真夏の広東語

灼け紅旗へんぽん関羽生誕祭

土用波波の裏より手が拳り

浴衣着に一皮むけていい女

水泳の足の切り傷オキシフル

竹煮草雨あたふたと駆け抜けて

ヤブニツケイ大樹自尊の秋立てり

腰折れの扇子使ひてふむふむと

烏瓜の花の縮みて昨日あり

侠客の鮎にしらじら谿明くる

手花火の音の奇天烈奇天烈と  
不景氣を一蹴せんと揚花火  
漂ふて花火の煙の大海月  
お昼寝の面付き直せ山の神  
秋蟬の遠く蔵書を死蔵して  
何に付けきゅつとやらねば盆最中  
ぶだう食ふ洪ある故の甘味なれ  
秋秋と尾鱗を付けて啼く蟬も  
連れ鳴きの末はだらけて法師蟬  
空蟬の貫き通す初一念  
月並みを恐れず恥じず名月吟  
俳諧の奉行何処に豊の秋  
熟柿皆承知年貢の納め時  
横須賀へ舟賃五十銭の秋  
角田武夫「金澤百景」水彩風景画  
社好き瀬戸明神の油蟬  
秋分金澤八景駅 懐古の木造駅舎の日章旗  
泥亀も首をすぼめて盆休  
世之介の昼寝の涎ぬぐひやれ  
心音も至極尋常明日は秋  
藪っ蚊の金属音の急降下  
急雨にもいけしやあしやあの法師蟬  
あな蟻の門渡り風船葛にも  
白芙蓉後事託すと云ひて墜つ  
颱風の何処へ抜けやうかと腐心  
山出しのししうどの花盛りなり  
夕立のあとのむむつとする中に  
わたつみに鳴神墜ちてどっぴんしゃん

夕立が上り辺りのなまぐさし

ダリエンソ手練手管のピアノの涼

低音部利かせ夜涼のダリエンソ

幼な子の見て見て見ての草もみぢ

信貴山縁起絵巻 飛倉巻露の鉄鉢長者の倉を持ち上げて

飛倉は野山の錦一つ跳び

命蓮の法力使ふ秋天下

信貴山縁起絵巻 尼公巻色変えぬ松をあふぎて尼の旅

大佛の夢のお告げに粧ふ山

迷へども持って出かけぬ秋扇

雀蛤になること容易なこっちやない

一龍齋貞水白浪物短けえ娑婆に昼の虫

そこそこの梨買うて来て褒めらるる

二の腕の歴然とあり秋の風

隼人瓜畑の先を通り雨

腹話術腹の底より秋の暮

秋風も紅燈趣味もそれとなく

衝羽根に鬼籍の人と昼の酒

こんなのと母が手拵げ穴惑ひ

虫時雨妻の寝顔のつやつやと

月渡る空朗々と虫今宵

根詰めて仕事にかかる虫の夜

烏瓜咲く辺の興味津々と

秋雨にひるむどころかあめんぼう

芙蓉咲く高さは風の通り道

蜘蛛の囀を払ふことなく庭掃除

ちちろ虫雨の音色と心得て

弁慶草起こし野分の後始末  
草千里一二三と霧湧いて  
糸瓜忌に出来て俗だが気に入る句  
口さがなき婆のがちやがちや娘のちゝろ  
蚊の姥に留守を頼んで出かけけり  
一波乱相撲秋場所上位陣  
烏瓜不思議や不思議霞み咲き  
芙蓉の葉食むは一体如何な虫  
長北九州行き夜のつれづれに湯の効能書  
臭かほす橙採る畑のあなたに周防灘  
鬼やんま青の洞門抜け来たる  
穴惑大日如来にっこりす  
ゆふいんに妻と遊べば色鳥来  
芒馳す彼方祖母山傾山  
花すすき夜盗さながら裾野馳せ  
熊本より来たばい真名井の滝はよか  
紅葉狩薩摩おごじよのバスガイド  
相まみえ臭橙の里の大日だいにち如来さん  
昼妻も亦ポシエツト族なれば闌けて鳴く虫もなき岡城趾  
有袋類おばさん秋の日向路へ  
日田杉のずんと高むや秋の空  
国東の仁王顔してぎんなん食む  
向日葵の百の素顔と阿蘇連山  
日豊線爪先立ちに曼珠沙華  
夜長宿宴席の名も草千里  
ゆふいんの霧に目の慣れ梅擬  
鉄漿蜻蛉おはぐろに羽搏ち疲れといふものなし

ゆふいんの銀鼠ずこ雨まみれ  
まんじゅさげその朱ヶ飛んで宇佐八幡  
祖母山の裾のコスモス高かばい  
霧込めののっぺらぼうぞ草千里  
カルデラを一目たりとも霧の中  
嘶きと思はるこゑも霧四辺  
熱泥のべっぷべっぷと秋の雨  
稲穂波そぞろ打ち合ふ神楽の里  
秋興の宿のだご汁かつぽ酒

● 白帝

烏瓜開花頗る珍にして

惘然齊藤史たる鷄頭に似て史の歌

物数奇がかうじて雀蛤に

あはててはいけない柿を滑る蜂

出し柴田宵曲文集流る本こそよけれ長き夜に

長き夜を読ませる宵曲妖怪譚

夜長咄狐が人を騙すかた型

長雨に櫻もみぢの目減りして

コスモスや奥羽に廻る碧梧桐

秋雨といふ長雨の至り方

枯れに入るもの一つに床擦れも

曼珠沙華突撃バンザイ花にして

烏瓜失せたる色を思ひつゝ

咳き込めば臟腑七転八倒す

柿色に降り注ぐ日に蜂降れり

コスモスのひとけの人氣なければ昇天す

コスモスの佳人の如きたたずまひ

コスモスに遠ざかりゆくをみなごゑ

睡蓮の四方の水面びらびらす

会心の音色ききちばった翔ぶ

かがよへる水の回廊あめんぼう

諸堀の意を強うせる風が吹き

風邪貰ふ妻は何でも欲しがり屋

ほうほうの体で逃げ出す咳地獄

流行風邪吾が屋台骨揺らすなり

あつあつのけんちん汁に風邪抜かん

釘抜けば悲鳴をあげぬ鴟日和

秋燈<sup>懐旧</sup>下勢ひし日には勢ひし書

とかとんと金槌振ふ敬老日

鶏頭の今年の種を見せに来る

こんなにも朝昼晩の風邪葉

居直れる風邪を追い出す粉薬

店頭の本に目利きの要る秋ぞ

足が向き神田古本まつりかな

山妻に風邪移りたる移したる

飛び方が目に見ゆきちきちばった翔ぶ

咳をする奴は不埒といふ目付

挿し芽してつきたる菊と聞かさるゝ

二軒目の八百屋に在りぬラ・フランス

折角の月の供へとはなれり

麗しき石榴新作見る如し

ピアソラのタンゴ魂露と凝り

納棺の泪は菊の蕾ほど

二階にて目覚まし鳴りぬ文化の日

日差しにも奥行のある稲架襖

石路浄土金ンのくしゃみをしたりけり

女郎蜘蛛金龍院の空を降り

どうかうもなく山茱萸の醜<sup>しこ</sup>もみぢ

暖房の音みしみしと試し焚き

柿落ちてたうたう一つ日の入り際

狗尾草<sup>えのころ</sup>の魂<sup>たま</sup>のぬけがら枯月夜

水鳥の日がなびしゃびしゃやあってをり

トラ<sup>永田耕衣逝く</sup>トラトラ！耕衣俳句は奇襲もて

何事も先手取るべし十二月  
書きとめてそれ清書して十二月  
冬物を著るといふより身を容るる  
唐突の真紅がよけれ猩々木  
ポインセチア飾り立てつつ「主は来ませり」  
小春日に水栽培の根が出たか  
おだてには乗ってみるもの猩々木  
菊花賞菊に係わりなき人出  
ポインセチア十鉢並べて景気付  
油断して地を擦るまいぞ千歳飴  
ぽっくりのしゃんしゃん歩き七五三  
日の差しておべぽかぽか七五三  
祥啓の耳毛の達磨お風入れ  
牧谿猿蟹捕へんと身を乗り出す  
室町水墨画展  
滝に皺入りて雪村観瀑圖  
暮雪の軸雪村八十二歳筆  
直伝の型歴然と蘆鷺圖  
近景に巨岩を配す冬景色  
着膨れて解説雪村鼻頂かな  
野毛山動物園  
錦蛇暫し見てゐてのぼせけり  
冬の日に駱駝の鼻先白っぽく  
網目キリンに木の葉旋回して落ちぬ  
檻抜けておこぼれ頂戴寒雀  
檻隣りホンドキツネのお忙氏  
丹頂に日本の色極まれり  
郷土史に明るき人と石踏をみる  
柿の家スウイングズビズビダバダバと



見えてゐるものが全てやいばむしり  
大接近ワクワクドキドキ流星群  
紅葉山人語鳥語に匹敵す  
草の絮何時までつづく有頂天  
てのひらで押さへて咳の震源地  
ちよつとしたことではいさかひ返り花  
寒鯉の水押す力鈍りたる  
けふの段取り朝の蒲団の中にゐて  
よく喋る女マスクで蓋をせん  
落葉日に日に少くなりて朝の舗道  
あまりにも人間臭きくわりんの實  
歳旦吟新年号用俳句を求められて作り今からそんな莫迦な  
ひざら貝冬ざるる身を張り詰めて  
同人会忘年会と金嵩む  
鈴懸の尾羽うち枯らすまでのこと  
新聞を裏返す音文化の日  
花八つ手瞬くやうに朝が来て  
水鳥の水破る音夕間暮  
鴨着水ざんぶとやってみせにけり  
木の実弘明寺十一面観音立像どき鑿目を残す観世音  
唐物相模 金沢六浦に三艘といふ地名ありてを揚げし湊や秋風裡  
厚着して俳句はこの眼この脚で  
爛酒にさようさようと応ず人  
本郷の学生寮の枇杷咲けり  
一政の上目使ひの鯉かな  
蕎麦啜る音に人品骨柄出づ  
鳥ごゑの弾ける如し白隠忌

壁いちまい抜け来る咳に力あり  
コアラは初冬のユーカリの葉をよく噛んで  
烏瓜どうせ採るなら器量好し  
木の実落つダーウィンレアは真顔にて  
へべれけのお手を拝借年忘れ  
罷り出て精霊ばったの御曹司  
首筋のすうすうオーバー羽織り初め  
掌を組んで目つむる車中極月へ  
大幅に賀状絞るか思案月  
新年を迎へる櫛の瘤だらけ  
立て込んで検尿 採血 咳 患者  
梅鶯の南部坂聴き早や師走  
耐寒性さくら草にて花果敢  
金目鯛よく見る為の大きな目  
まはりから徐々に片付き木守柿  
プールサイド雨の落葉のわっさわっさ  
寝支度の電気毛布をぬくめに行く  
数え日の雑用買って出ることも  
鴨の名にいやに詳しき女ゐて  
じたばたのじたの師走のちんどん屋  
じたばたのばたの大つごもりなるよ  
ほかならぬ妻の頼みの煤払ひ  
高張を要所要所に義士祭  
それはまたそれでけっこう長火鉢  
湖上に降り鴨の比良組比叡組  
殲滅の白山茶花でありにけり  
鳩は潜水精進吾は句精進

百千の鴨の一つとなり湖上

傾城も手玉羽子板市に取られ羽子板市

売り顔も商ひの内羽子板市

一生もの羽子板なりと売り口上

志ん朝の買札付きぬ羽子板市

横顔の誰ぞに空似羽子板市

羽子板市東都ツアーに組み込まれ

ちよつくら前ごめんなすって羽子板市

二代目も笑顔で対す羽子板市

灯が点いて寝ずの商ひ羽子板市

一回りして元の店羽子板市

角店の助六よかり羽子板市

羽子板の値踏み群がる頭越し

ねずみ小僧見得切る羽子板それがよし

置炬燵出がさ市の客相手

落葉も\*山東京伝机塚句碑 耳もそこね足もくしけてもろとも世にふる机なれも老たりて机塚埋めん合点じや

机塚あたじけなしの冬日差し

橋越へて水もしたたる都鳥

心臓の鼠鳴きする寒さかな

酒やれば風が募りて松葉蟹

さそひには口を濁して年忘れ

一病を持ちて海鼠の類ひなる